
youth

嘘つき桃頭巾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

y o u t h

【Nコード】

N 8 6 9 9 P

【作者名】

嘘つき桃頭巾

【あらすじ】

青春満喫したいお年頃の波留。ある日、波留のクラスにハーフの男子が転校してきた！何故か波留に親しくしてくるハーフ転校生に波留の心は揺らぐばかり。

そんな時、波留の親友・美柳の間で事件が起こって――：

(前書き)

『a m i r a g e』より長い…! 制作日数、三日w
是非読んでいただければ…。

♪♪

軽快な、携帯の着メロが流れた。丁度、自分の部屋のTVで、日曜のお決まりアニメ・『サザエさん』をダラダラと見ていた時だった。身体を起こし、携帯を開いた。『差出人…青野唯^{あおのゆい}』。現在海外留学している、大学生のあたしの姉からだった。

「んー？唯があたしにメールしてくるなんて、珍しい…」

そう言いつつ、本文を読む。

『差出人…青野 唯

RE ..なんと!!

本文

波留ー！？聞いて聞いて♪

私にもねー、ついに彼氏できちゃった☆外国人のだよ？凄くない？？

紳士的で良い男性なんだよ？それにイケメン？私と同じ年なのに、大人っぽいの？

将来の波留の義兄になるかもしれないよー？

日本戻ったら、紹介するから☆

それじゃ、またねえ（w、）ノシ』

「へえ！外国人の彼氏！？すごーい！唯、やるなあ」

そう言って、あたしは返信した。

『差出人…青野波留^{あおのはる}』

RE

..すごッ！

本文

凄ーい！！万年彼氏無しの唯が、外国人の彼氏できたなんて！！
羨ましー。あたしもそろそろ彼氏作った方が良いのかなあ？

国際結婚も夢じゃないね！

あたしもその紳士的な彼氏に会ってみたい！義兄になるかもだし♪
留年するなよw 早く会ってみたいから！！

そんじゃ、勉強ガンバ☆』

「送信、つと…。だけど、本当に良いなあ。唯」

万年彼氏無しだと思っていた姉に、彼氏が出来たとなると、あたしは半分嬉しく、半分羨ましい気持ちになった。仲間が一人消え去ったような、寂しさもあったりした。

「良いなあ。あたしも彼氏、欲しいなあ」

だが、あたしのクラスにはロクな男子がない。中三だから仕方無いのかもしれないけれど、エロいし、下ネタばかり言うし、ガキだし。あたしの理想には程遠い。

「出会いなんて、なかなか無いよね……」

唯のメールには、幸せそうなオーラが溢れていた。そんなに、外国人の彼氏って、紳士的で、格好よくて、幸せにしてくれるのかな？なら、なら、あたしだって…。

「あたし、外国人の彼氏が欲しい！！外国人の彼氏と、青春満喫したい！！」

宣言したきっかけは、姉・唯の一通のメールだった。

翌日。青野家では、騒がしい朝が始まっていた。

「ちょっと、お母さん！！どうしてもっと早く起こしてくれなかったのよ！！」

「母さん何度も起こしに行ったわよ！波留が爆睡してただけよ！」

「ならもっと大きな声で起こしてよ！」

「ええ、大きな声で起こしたわよ！あんたの鼓膜が破れそうなくらいにね！」

「全く聞こえなかったけどなー！！」

月曜日の朝というのは大体こんなもんだ。

「もー、あたし自転車通学なんだよ！？急がなきゃダメなんだから！」

「はいはい、もうこんな時間経ってるんだから、仕方無いでしょう！？ほら、パン食べて！」

「いらない！行ってきます！」

「あ、ちょっと!?!波留!?!?」

あたしは、自転車通学だ。ひったくるようにして自転車にまたがり、学校へと向かった。途中、コンビニの前を通った時、菓子パンの誘惑に負けそうになったが、我慢をした。

「つ、着いた!新記録、15分32秒!?!いつもの半分の時間!」

駐輪場に自転車を止め、教室へと急ぐ。先生達の目を盗み、階段をダッシュで駆け上がった。と、その時。

「きゃっ……!」

上から下りてくる誰かさんにぶつかってしまい、バランスを崩した。頭から真っ逆さまに落ちていく――。

「oh!no!!」

小さい叫び声が聞こえた、気がした。だが、その時のあたしには、もう地面が見えていた。

「イヤー!!あたし死にたくない!!」

階段から落ちたときで死ぬ事はまず有り得ないが、その時のあたしはかなり動転していたようだ。だが、その祈りが天に届いたのだろうか。スツと、風が吹いた気がした。

「えっ…!?!」

気がついた時、あたしはどこにも痛みを感じず、地面の硬さも冷

たさも感じていなかった。むしろ、暖かく感じたくらいだ。

「えっ、えっ…あたし、助かって——？」

「大丈夫、です、か？怪我は、ないです、か？」

カタコトの日本語が返ってきた。顔を上げると、そこには、明らかに日本人とは思えない顔立ちをした男の子が真剣な眼差しでこちらを見ていた。そして、あたしを抱きかかえていた。

「え、あの…」

「大丈夫、です、か？怪我、は？」

「あの、な、無いです。どちら様でございますか…？」

「失礼しました。僕は、レン、といい、ます」

「レン…君？あ、あの…助けてくれて、有り難うございます」

「君付けしなくて、いい、ですよ。失礼ですが、貴女の、お名前は？」

「あ、あたし、青野 波留って言います」

「波留…。良い名前、ですね」

「ありがと…。あ、レンって、どこの国の方なの？」

「僕は、母がアメリカ人、で、父が日本人…。つまり、ハーフ、で

す」

「そうなんだ」

「あの、波留。一つ、聞きたい、のですが」

「ん？なあに？」

「三年B組の、教室を、探しているのですが、迷って、しまったんです。どこに、あるんでしょうか？」

「あ、そこ、あたしのクラスだよ。丁度行く所だから、一緒に行こ…って、ヤバ！遅刻！！」

「チ、コ、ク…？」

「急ぐよっ！」

あたしは、レンの手を引いて、階段を駆け上がった。すっかり忘れてた…遅刻のことなんて。

ガラッ

「遅れてすみません！！」

あたしが大声で言った。途端に、クラス全員の視線がこちらに集中した。先生は、眉間に皺を寄せ、睨んでいた。ああ、そんなに睨んだら皺が増えちゃうよお、なんて当然言う暇も無く、先生が口を開いた。

「…青野さん。貴女、いくら実家が遠いからって、この時間に登校は無いんじゃないの？」

「え、あの…これには、海より深い訳がありましたっ…！」

「言い訳はよしなさい」

ですよねえ、言い訳は駄目ですよねえ。当たり前だ。すると、今まであたしの後ろで大人しくしていたレンが、あたしの前に出てきた。

「あの…先生。波留は、悪くない、ですよ」

「庇うのはよしなさい…え？」

「波留は、悪くない、ですよ」

「ああっ！加納屋君！どこに行っていたの！？」

へ？加納屋？もしかして、レンの姓の方？

「教室に、行こうとしたら、迷ってしまっ…。ウロウロしていたら、波留が、倒れていたの、助け、ました。それで、お詫びに、と波留に、教室に、案内してもらったのです」

レンの言う事には誤りがあった。正確には、あたしはレンにぶつかって倒れたのだし、お詫びに案内したんじゃないくて、たまたま行く所が同じだったから案内した、っていうだけだ。だが、皆の前で言うなら、誤りを訂正しない方が良さだろう。

「そうだったの…。じゃあ、いいわ。青野さん、席に着きなさい。
加納屋君は、こっちに来て」

「はい」

すごすごと席に着いた。良かった、レンが居てくれて。ハーフなのに、物わかりの良いヤツ。…そういえば、レンはどうしてこの教室に用があつたんだろう。まだ聞いてなかった。

先生は、コホンと一つ咳払いをし、声を発した。

「えー、今日からこのクラスで過ごす事になった、加納屋君です。
加納屋君、皆に挨拶を」

「初めまして。アメリカから、転校してきました、加納屋 レンです。――見ての通り、僕はハーフです。日本語は、一応、話せますが、カタコト、ですし、まだ難しい言葉、などは話せません。――宜しく、お願いします」

女子の間からだろうか。『カッコいい…』と囁く声があちこちで聞こえた。まあ、確かに、顔は悪くない…かな。美形だと思う。髪は栗色で、お洒落にセットしてあるし。

「じゃあ、席は…」

先生が言いかけた。だが、レンがすぐさま言った。

「僕、席は、波留の隣が、良い、です」

え？

あたし???

何で?

「そうね…青野さんの隣は丁度空いているし、良いわよ」

「有り難うございます」

レンは、スッと歩いてきて、あたしの隣の空いている席に座った。同時に、目が合った。そして、優しい笑みを見せた。ヤバ…なんか、カッコいい…かも……。

ドギマギして、思わず俯いてしまった。なんか調子狂っちゃうよ…!

「よろしく、波留」

レンはそう言って、アメリカン・スマイルを見せた。

「よ…よろしく」

あたしは素っ気なく言った。ああ、本当はにっこり笑って笑顔で言うつもりだったのに。

授業は、とてもじゃないけど頭に入らなかった。数学では公式とレンの顔がごちゃごちゃになってしまい、小テストで酷い点数を取ってしまった。

やっとの事で午前中の授業が終わり、あたしは机につっぱした。

つ、疲れた…。あたしがくたばっている中で、皆は騒がしく弁当の準備をしている。あ…もう昼休みか…。あたしは、いつも一緒に昼休みを過ごしている、親友の美^{みや}椰の所へ向かった。

「美椰ー！弁当食べ…」

「ゴメン…私、今朝から気分悪くて…もう早退するから、一緒に弁当食べられないの」

「え…？大丈夫…美椰…？」

「全然平気だけどね、保健の先生が帰った方が良いつて」

「そう…じゃあ、お大事にね」

「うん、ありがと、波留」

そう言つて美椰は教室を出て行ってしまった。どうしよ…あたし、誰と食べよう。既に、教室に女子はいない。

「一人で食べるしかないか…」

諦めて、教室を出ようとした時。肩を叩かれた。

「何よ…」

半分イラッとした気持ちで振り向いた。

「一緒に、お弁当食べましょう、波留」

振り向いた先には、ニコニコ笑っているレンが立っていた。

「レ…レン」

「…一緒に、食べるのは嫌ですか？」

え…弁当一緒に食べたいって言っているの？

「な…なんで私？さっき、男子達と仲良さそうに喋れてたじゃない」

「僕、は、波留と食べたかった、んですよ」

「…そうなの？」

「はい」

まあ、美椰は早退しちゃったし…良いか。

「…良いよ」

「有り難う、ごさい、ます」

あたしは、レンを屋上へと案内した。その時のあたし達は、周囲には、どう見えていたんだろう。…カップルだとか、思われたりしなかったのかな…なんて思ったりもした。だが、レンはきっとそういうのは考えていないんだろう。普通だったら、「弁当一緒に食べよう」なんて言ったら、脈がある証拠なんだけど、レンの事だ。あたしと少し親しいから、誘っただけだろう。

って、あたし、なんでさっきからそんな事ばかり考えてんの！？

「ここが、屋上、ですか」

「そう。あたしが美椰いつも弁当食べている所があるの。…良い場所だから、教えたい」

「是非、教えて、下さい」

あたしはいつもの場所へと向かった。

「ほら、ここ！この屋上の中で一番景色が綺麗なの！この街全体が見渡せるよ」

「…確かに、綺麗、だ」

「でしょお？じゃ、ここで弁当食べよう♪」

「はい」

私は、巾着からお弁当箱を取り出した。レンも、四角くて大きな箱を取り出した。

「…レンの、大きくない？」

「…？アメリカでは、普通、です」

「中に何入ってるの？」

「フルーツとか、ポテトチップス、です」

「ええ！？アメリカってそういうお弁当なの？」

「…珍しい、ですか？」

きょんとした瞳で見つめてきた。…なんか、子鹿みたいな……。思わず、笑ってしました。

「アハハハ！」

「……？？何か、可笑しいですか？？」

「…うん！」

「……！？」

元々大きな目を更に大きくさせて、驚いている。レンとなると、全てがスローライフになるなあ。今日初めて会ったのに、前からずっと知り合っていたような、そんな感じがして、ハーフなのに、全く違和感が無い。

「…そろそろ、お弁当食べよう！」

そうして、あたしとレンの昼休みが終わった。すごく短く感じられる昼休みだった。

「起立ー。礼ー。」

「「「さようならー！」」「」」

今日の全ての課程が終わり、下校時刻になった。

あたしは、スクールバッグを背負い、下校の準備をした。あたしは学区の端にあるマンションに住んでいるので、誰も同じ方向の人がいない。美椰の家とも全くの逆方向だ。だから、普段から一人で下校している。

「波留！」

レンの声だ。

「なあに？」

「波留の、家、は、どの方向、ですか？」

「あたしの家？あたしの家は、学区の端っこの、○△マンションだけど…」

「僕と、一緒に、マンション、ですね」

「ええ？そうなの？」

「はい」

「そういえば、噂で外国の人が越してくるって言ってた気がする…。レンの家族の事だったんだ」

「そういう、ことになります」

驚いた。なんかあたし、何かとレンと巡り合わせがあるよなあ。

「あの…波留。一緒に、帰りま、せんか？」

「んー…。じゃ、良いよ」

「有り難う」

なんかこのパターン、さっきもあったような？

「そういえば…波留の、友達の…美椰、でしたっけ？」

帰り道、初めて声を発したのはレンだった。

「美椰が、どうかした？」

「調子、良くなると、いいですね」

「そうだね…。美椰、風邪とか引いた事ないのに。小学校も皆勤賞だったし、中学も昨日までは皆勤賞だったのに……。でも、どうして？」

「美椰が、早退した、時、波留は、すごくテンションが下がっていました」

「えっ…？そ、そう見えた？」

「今日、初めて、会いましたけど、波留は、基本的、に、テンションが高かったから、変だな、と」

「うーん…。あたし、テンション高いってことで認識されてんの？」

「（コクン）」

レンは、小さく頷いた。

「そっかー。でも、美椰には元気になって欲しいな。」

「そうですね。ところで…波留には、彼氏は、いるのですか？」

「ええ！？あ、あたし？」

「はい」

「…あたしね、いないの。美椰は彼氏持ちなんだけどね。確か、高校校生…高三くらいかなあ。年上の彼氏がいるよ」

「そうですか……」

なんでそんな事聞くんדר？

「あ、着いた」

「では――」

「あーっ！ちょっと待って！」

「…なにか、あるのですか？」

「メアド♪交換しよーよ♪」

「め、あ、ど…」

「ケータイ、持っているでしょ？」

「一応、持ってます」

「ちょっと貸して！」

「はい…」

あたしは、慣れた手つきでケータイを操作していく。

「よしっ完了！後で、メールするよ」

「お願いします」

「それじゃあ、また明日ね！」

「さよう、なら」

今日は充実していたなあ。

それから、あたしとレンは日に日に仲良くなっていた。だが、一番の親友・美椰が、学校に来なくなっていた。あたしは、レンとのメールの合間に、必ず『どうしたの？』や『大丈夫？』などのメールを送っていた。…だが…返信は無かった。

そして、そんなある日の事。いつものように、レンと他愛も無い話題だがメールをしていた時だった。あたしは、レンから来たメールに返信をして、ベッドに寝転がっていた。

~~~~~?

電話の着信音が鳴った。

「…レン?なんで電話…?」

そう言いつつも、ケータイを開いた。待ち受けに浮かんでいた文字。『公衆電話』。誰だろう、公衆電話からかかってくるなんて…。あたしは電話に出た。

『……………』

電話の向こうの相手は何も話さない。聞こえるのは、雨音だけだ。外は、雨が降っていたらしい。

「あの…。どちら様ですか?」

苛立って、あたしが言う。

『波……留………』

懐かしい声が聞こえた。

「…!美椰……!?!?…どうしたの!?!美椰!」

『私…私………』

「美椰、落ち着いて……」

『波留…今から、出れる?』

「…う、うん…出れるよ」

『いつもの…公園に来て…。話したい事がある…』

「分かった!…今すぐ行く」

『うん…お願い』

あたしは、傘を持って、いつも二人で語っていた公園へと急いだ。雨はかなり強くなっていて、あたしが履いているデニムのジーンズはびしょぬれだ。だが、そんなのは構わず走った。

「はあっ…はあ…」

「波留…?」

「み、美椰…!」

美椰は、公園に確かに居た。

「どうしたの…?話して…」

「…なんか、波留に理由も言わずにずっと学校休むのは、心苦しいって思ってる」

「そうだ…。大丈夫?具合悪くない?」

「うん…大丈夫…大丈夫なんだけど…」

「どうしたの…?」

「波留は…親友だから。だから、波留には、言う。言いたい。例えば波留が私の事を親友だって思ってくれなくなっても」

「何言っているの? あたし達、親友じゃん! 一生、親友だって、誓ったじゃない」

「ううん…。本当に、私は、波留と親友でいられる資格なんて無いの」

「…どういう…こと?」

「私…私…妊娠したの」

「え……? ……何、言ってんの。冗談でしょ?」

「違う…違う! 本当なの!」

「え…?」

「もう、私のお腹の中には…新しい生命いのちがあるの! 嘘じゃないの!」

「それって…彼氏との、赤ちゃん?」

「…そう……なの…」

「本当に…妊娠しちゃったの……?」

「そうなの…！私は、赤ちゃんを育てられる程大人じゃない！なんて無責任な…！私は人間である価値が無い！」

「そんな…そんな…」

あたしの手から傘が滑り落ちた。瞳からは、涙が溢れていた。それは、美椰もだった。美椰は、泣いていた。

「ごめん…！ごめんねっ……！私なんか、本当に…消えてしまいたい！」

「美椰…美椰…美椰……」

「もう…私は退学だわ」

「え…？」

「私は…この子を殺すことは、出来ない。生命が生まれるって、奇跡以上に奇跡なの！素晴らしいことなの！私には…この子を殺せない。小さくても、生命が宿っているの！私には、それを壊す事は出来ない！」

「産む…ってこと……？」

「両親に言ったの……。そしたら、『産むなら親子の縁を切る』って。だけど…だけど…私は、この身体が滅びても、この小さな生命は守らなくちゃいけないの！」

「美椰……」



あたしは地面に座り崩れた。美椰…美椰……。

「皆には…隠しておくつもりだったの。でも、波留には言いたかった。波留は、親友だもの」

「美椰……。あたしは、美椰とはずっと親友だよ？信じてよ。美椰が決めた事なんでしょ？あたしに口出しする筋合いは無い。だけど…だけど…あたし達、まだ子供だって言って良い年齢だよ？育てる事なんて、出来っこ無いじゃない」

「波留…でもね、私、決めたの。私の身体に感じる生命……。私を選んでくれたの。私は、守ってあげたいの」

「……本気なの？」

「私は、本気よ。退学になっても良い。この生命は守りたいの」

「……辛いかも、しれないよ？」

「辛さなんて、この子を思えば乗り越えられる」

「自分が、壊れちゃうかもしれないよ？」

「自分より、この子が大切なの」

「……負けた」

「波留……？」

「正直、そこまで本気とは思わなかった。もう、あたしが口出しで

きる隙間はどこにも無かったよ、美椰には。…でも、信じて？辛く  
なったら、あたしに言つてよ。もう…あたしには生命を任された気  
持ちなんて、分からないよ」

「波留」

「はっきり言うと、哀しかったよ」

「ごめん…」

「…：謝んなくてもいいけど」

「ハハッ」

「ほら、あんまりこの雨の中で傘ささずにいると、冷えちゃうよ？  
そのお腹の子も。そろそろ、帰りな」

「…：そうだね」

「…：バイバイ」

「うん、バイバイ！」

そう言つて、美椰は去って行つた。

「……………美椰っ……………！」

あたしは、さっきよりも激しく泣いていた。そのあたしを、嵐の  
ような雨がひたすら打ちつけていった。

次の日。あたしは、いつものように学校に行った。勿論、誰にも昨日のことは言うつもりは無かった。

「おはよー！波留っ♪」

「あっ、おはよ♪彩海☆」  
あやみ

彩海、というのは、美椰の次に仲が良い子だ。

「ねえ、まあ波留なら知ってると思うけど、美椰、転校したんだって。挨拶も無しに…。急だし、淋しいよね」

「あ…そんな急に？」

「うんー。さすがに、淋しいな」

「そうだね…」

『転校』。退学じゃなくて、表向きには『転校』なんだ。本当は、『退学』扱いだと思うけど。

「おはよう、波留」

「レン、おはよー」

「…元氣、無い、ですね」

「……そう？いつもと一緒だけど？」

返事するのが、いつもより2秒、遅かった。

「元氣、だと、良いんですけど」

「心配性だなあ、レンは」

「よく、言われ、ます」

喋っていたら、予鈴が鳴った。

朝のSHRの時間に、先生は少しだけ美椰の話題に触れた。  
ショートホームルーム

「えー、河崎美椰さんが…転校しました。急な話で、挨拶出来ませんでしたけど」

たったこれだけの言葉で美椰の『退学』は切り捨てられた。

授業も張り合いが無く、とにかく楽しみが無かった。隣から感じる、レンのこちらを見つめる視線も、あまり感じられなかった。見かねた彩海が、休み時間の度に来てくれて、あたしを励まそうと色々してくれた。だが、やはり立ち直る気にはなれなかった。

弁当も一人でひっそりと食べ、多分中学校生活で一番楽しくない日だったと思う。

そして、その暗いテンションが下校時まで続いた。

「波留…帰りま、しょう」

「うん…そうだね」

かなり落ち込んでいるあたしに、レンは思いがけない事を言った。

「美椰の…妊娠のこと、でしょう？」

「えっ…！なんで知ってんの…？」

「美椰本人に、聞きました。『きっと波留が落ち込むから、レンが励ましてあげて』と――」

「そう…なんだ」

「はい。だから、色々あるなら、僕に、全部、話してください」

「…：…なんかさ、漠然とした感じなんだよね。美椰があたしの前から姿を消して、それだけじゃなくて、子供を産むっていう…。すごく哀しかったし…：…、だけど、すごく輝いてた様にもっ…：…思えたし…：…」

最後の方は、もう涙声になっていた。

「美椰が…：…美椰が…：…。あたし、美椰がああの彼氏に騙されてるんじゃないかって…：…！だから止めたかったのに…：…。でも、何でも言っ、って事しか言えなくなっ…：…！美椰の堂々とした態度には…：…入り込む隙間が無いって…。初めて、美椰を遠くに感じちゃって…：…！美椰ともう会えなくなるかもって…：…！」

「…：波留が、出来る事は、全て、したんじゃないですか？」

「え…：…？」

「美椰だって、不安は、あったと思い、ます。だけど、『辛かったら言って』って言ったこと、で、美椰は、すごく安心できた、と思いますよ」

「……でも、あたしは、止めたかった」

「美椰の立場に、なってみましたか？」

「どういう事…?」

「美椰は、やる事は、完璧にやるし、妥協を、許さない。そして、自分の信念を、貫き、通す。――親友の、波留なら、当然知っています、よね? その美椰に、『やめろ』と言って、訊くと、思いますか?」

「思わない…」

「ただ、どんな形であれ、波留が、美椰に対して、何か意見を言いたかった、ということは、波留は美椰を、見捨てていなかった、という事です。美椰は、それだけで、嬉しかったと、思います、よ」

「…そうかも」

「波留は、いくら、美椰が世間様から見て、邪道な事をしたとしても、美椰を信じている、でしょう?」

「勿論じゃない」

「ただ、美椰は、年齢のわりに、少し大人の方に、いってしまった

んです、ね」

「…そうだね」

なんか不思議。カタコトの日本語なのに、すごく安心感を感じる。

「僕等は、まだ、youth を、楽しまなければ」

「…？ youth？？」

youth？何だそれ。

「……波留」

「なあに？」

「i love you」

「…え……」

『i love you』の意味。英語が苦手なあたしでも、分かる。

「……僕と一緒に、youthを楽しみませんか？」

「……あたしも、レンのこと好きだよ」

「それって、OKって、こと、ですか？」

「…そういうこと！」

あたしは、レンに抱きついた。

「大好きだよ」

「僕も、です」

あたし達の青春は、<sup>youth</sup>まだ始まったばかり。



**(後書き)**

どうでしたか!?

感想等くれると嬉しいです☆

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8699p/>

---

youth

2011年1月13日02時56分発行